



根岸 淑子さん(立野)

家族で静岡県磐田市に避難する根岸さんから
お手紙が届きました。



▲立野の風景 (平成20年8月撮影)

浪江町の皆さん元気でお過ごしでしょうか。
遠くふるさとを想いながら机に向かいました。現在、私は静岡県磐田市に住んでいます。福島からはとても遠いので、ふるさとを思う気持ち、皆さんと会いたい気持ちはひとしおです。

避難所を転々とされた方、仮設住宅に入居された方、そして私のように県外に避難せざるを得なかった方、同じ住民であるにもかかわらず、全国に散らばってしまいました。皆さんも同じ思いだと思っています。苦しさ、悲しさ、悔しさ、胸の痛み、それらを共有しているからわかちあえるのだと思います。

今日は震災後に作られた唄を紹介したくて筆を持ちました。『ふるさとなみえ』というタイトルです。私た

ちの思いをそのまま詩にしてあります。この唄の作詩、作曲、歌手ともに浪江町生まれの方々です。

- 作詩 根本昌幸さん (荻野出身)
- 作曲 民謡歌手の原田直之さん (高瀬出身)
- 歌手 沢田貞夫さん (荻野出身)

詩を読んで涙し、曲を聞いては涙しております。とても良い唄です。浪江町の皆さんもぜひ聞いてみて、歌ってみてください。

この時期にと思われるかもしれませんが、だからこそ必要なこともあります。唄は、人のこころを動かします。生きる術の原動力にもなります。私も精神的にまだまだ立ち直れる状況ではありませんが、皆さまにも、自分にもふるさと浪江町の風景を忘れず、胸にとどめて頑張つてほしいと思います。

テレビで繰り返し放映される津波の映像を見ながら、犠牲になられた方々がたくさんいらつしやる、そのご家族の苦しみ、悲しみを思ったときに、「私たちは頭を垂れているばかりではいけない！生き残った者の使命として、地に足を踏ん張って生き抜かなければ。」と、少しづつそう思えるようになりました。

皆さまのために何ができるか。「こんなに遠い静岡にいて、手も届かず、せめて文字を書くことで皆さんと通じ合いたい。」そう思いました。皆さまにお会いしたいです。

「ふるさと なみえ」

- ふるさと離れ 遠くへきたよ
ふるさとはいい けれど帰れない
帰りたいなあ わがふるさとへ
みどり豊かな あの町へ
ああ夢にみるよ ふるさと浪江
- 鮭のぼりくる 泉田川よ
にぎわいをみた 請戸の浜よ
帰りたいなあ わがふるさとへ
桜花咲く 丈六へ
ああ夢にみるよ ふるさと浪江
- 秋は紅葉の 高瀬の溪谷よ
美しかった あの一の宮
帰りたいなあ わがふるさとへ
とどろきわたる 不動滝
ああ夢にみるよ ふるさと浪江

浪江のこころ通信

●第9号●



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第9号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261





豊田久美子さん(高瀬)

取材者：(特活) ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋・長澤
取材日：2月14日

子どもたちの笑顔が一番

震災の当日は子どもを連れてスバリゾートハワイアンズに出かけていたので、偶然にも津波の被害を免れることができました。帰り道の国道は走れない状態で、山道を6時間かけて帰宅しました。偶然が重なり、一家全員津波の被害を免れて無事でした。3月14日には千葉市に住んでいる叔母を頼りに、親族10人で避難してきました。今は千葉市内の賃貸住宅に夫の両親、私と子どもたち3人の家族6人で住んでいます。震災から1年、避難生活をしながら子どもの成長を見守っていてあつというまに時が過ぎたように感じます。

夫は原子力発電所関連企業に勤めていて、4月から福島県内で一人暮らしをしています。週末が休みのときは戻ってきてくれますが、身体のこと心配です。

■元気で頑張ってるよ
浪江小学校は歩いて3分ぐらいで着いたけど、増田小学校は徒歩で1時間くらいかかるかな。でも、お友だちといっぱい話しながら行くから楽しいし、大変じゃないです。冬になってからは車で送ってもらっているけど、帰りはスクールバスです。

■遊びに来てくれるといいな
増田には今まで何度も遊びに来てたけど、去年も今年も雪が多いし、寒いのでびっくりしてます。



▲左から萌絵ちゃん(5歳)、久美子さん、悠人くん(1歳)、大貴くん(7歳)



稲垣颯一郎さん(小4)(権現堂)

取材者：(特活) 秋田県南NPOセンター 八嶋
取材日：2月12日

「家族一緒に暮らしたいな」

颯一郎くんのご家族は、震災直後、福島県内のおばあちゃんの家へ逃げた後、3月15日におばあさんのいる秋田県横手市増田町に避難しました。現在お父さんは埼玉県内、お母さんは福島県内で仕事をしているために離れていますが、おばあちゃん、お姉さんと一緒に住んでいます。



▲これから「かまくら」になる予定の雪の山の前で撮りました。左から、真於さん(中1)、颯一郎さん、おばあちゃんの前馬由利恵さん

■元気で頑張ってるよ
浪江小学校は歩いて3分ぐらいで着いたけど、増田小学校は徒歩で1時間くらいかかるかな。でも、お友だちといっぱい話しながら行くから楽しいし、大変じゃないです。冬になってからは車で送ってもらっているけど、帰りはスクールバスです。

■遊びに来てくれるといいな
増田には今まで何度も遊びに来てたけど、去年も今年も雪が多いし、寒いのでびっくりしてます。

週末にお父さん、お母さんが来るのが楽しみです。お父さんは8時間位、お母さんは5時間近くかけて冬の道を運転して来るのが心配だけど。



東京都

岡本 亜矢さん(酒田)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：2月11日

震災で直面したさまざまな経験を 子どもたちの人生の糧にしてほしいと願う

岡本亜矢さんは現在、夫の宗広さん、長女の梨瑚さん(中1)、次女のちりさん(小4)、そして愛犬のとん平と東京・町田市で生活する。震災後の4カ月間は、山形市内の総合体育館などの避難所で長く暮らした。



▲左からちりさん、梨瑚さん、亜矢さん、とん平、宗広さん

震災後、原発の影響を心配して、親戚がまとまって山形市の総合体育館に避難しました。避難所の生活環境は少しずつ変化しつつ、結局、子どもたちの夏休みまでの4カ月間をそこで過ごすことになりました。その間、近隣の方からお風呂を使わせていただいたり、物資を提供していただいたり、地域の皆さんには本当に温かい手を差し伸べていただきました。人のつながりの尊さを実感した4カ月間でした。

その後、夫の仕事の関係で現在の東京・町田市に移りました。子どもたちも私たちも生活環境は浪江のときとは変わり、浪江のときの1学年1クラスの規模から、8クラスもある大規模校への転校。浪江では、夫の親・兄夫婦も身近な所にいましたが、今は福井県やいわき市などにバラバラに暮らしており、支え合っ

て暮らしてきた以前のように、すぐに会える距離ではなくなりました。残念です。

姉の梨瑚はバトミントン部に所属して毎日頑張っていて、妹のちりも浪江のときに頑張っていた陸上をこちらでも続けています。浪江の陸上の監督が、震災後も合宿や大会があるたびに声をかけてくださり、クラブが存続していることに感謝しています。浪江とのつながりはこれからも大切です。今年の3月には、ふるさと学校として浪江の小中学生が1泊で福島に集まる予定されていて、とても楽しみです。これからは浪江町主催の交流の場には積極的に参加したいと思っています。夫とも子どもはよく話し合います。何よりも放射線量が心配です。子どもたちが独立するまでは県外で頑張りたいと思いますが、そのあとは浪江に帰りたいと思っています。行政の皆さんには、「帰りたい」という思いはあっても帰れない」という県外避難者の思いをぜひ考慮してほしいです。



静岡県

堀川 文夫さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：2月11日

「この震災がもたらした真実とは何か」 子どもたち、そして社会に向けて発信していきたい

堀川文夫さんは、妻の貴子さん、そして愛犬ももと愛猫みかんとともに静岡県富士市で生活する。震災後も、浪江で経営していた学習塾の子どもたちを励まし、交流をくり返してきた。震災の経験と教訓をふまえ、新たな土地での歩みを始めようとしている。

私は震災前から、自分の塾に通う子どもたちに原発の危険性や避難方法などを伝えていました。まさか本当にこんなことが起こるとは思いませんでしたが、現在の線量でも危険性は否定できないはず。そこに人々が暮らし続けることには違和感があります。浪江町として集団でどこか別の土地に移転するなども選択肢の一つでしょう。しかしそれどころか、これだけの災害に直面したにもかかわらず、わずか1年足らずで国内の原発も再稼働を容認するなど、何だか元の日本に戻ってしまうような危惧があります。あの大地震と原発事故が私たちの社会にもたらしたものは何か。私たちはどんな社会をめざすべきなのか。子どもも大人も真剣に議論すべきときではないでしょうか。あまりにも東北、福島、そして浪江町から声が上がらないことが残念です。できれば福島・浪江の皆さんと意見を交わしながらつながりをつくることのできる機会が欲しいですね。

県内避難者に比べ、県外避難者への対応の足りなさを実感しています。また、「自主避難」という言葉でくくられた、東電と国の責任逃れの犠牲者たちへの対応の足りなさには腹立たしさを通り越して悲しくなります。実は私たち夫婦も、県外での暮らしについて昨年末までは気持ちの整理がつかせませんでした。今はこの静岡の地で頑張っていると思っています。ただ、たとえばどこに暮らしていても浪江町民という気持ちに変わりはありません。



▲左から貴子さんと文夫さん



埼玉県

渡邊 幸さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：2月10日

‘浪江は私たちのたった一つのふるさと’ 娘の言葉に思いを新たに

震災後、津島から福島市、新潟・三条市などを転々とし、現在は埼玉県所沢市に夫の良一さん、次女の喜沙羅さん(小6)、長男の魁杜君(中1)、そして愛犬のクレヨンと暮らしている。ご両親は福島市に、大学生の長女・未佳里さんは仙台におり、家族は離れたままである。

今生活している所沢市は、夫の出身地であり、仕事の関係もありやってきました。現在の住まいに移る際には、所沢市役所の職員の方に誠意ある熱心な対応をいただきました。あらためて、人のつながりやご縁が大切であることをこの震災を通して実感しています。こちらの学校に通う2人の子どものも、学校に慣れ親しんでいることにホッとしています。ただ、夫の仕事の先行きが不安なこと、そして何よりも浪江町のこれからの見えないため、先のことを何も決められないことが悩みです。この春に政府が決定する新たな避難区域がどのようになるのかも心配です。

私たちは、父の代から長年、権現堂でガソリンスタンドを営んでいたこともあり、お店に来られる浪江町の皆さんや、地域のつながりは本当になつかしいです。子どもたちは、権現堂の商店街の夏祭りや太鼓をしたり、ママさんバレーをしていたり、ママさんバレーをしていたり、私は、行政区対抗のスポーツ大会などを楽しんでいたことを思い出します。原発事故によって、こうした地域のつながりが失われたことが寂しく悲しいです。ですが、今も商店街の皆さんが声をかけてくださり、時折、十日市などが開かれるたびに二本松に行っています。ありがたいことだと思っています。



▲左から魁杜君、良一さん、喜沙羅さん、幸さん

のしゃべり場にももちろん参加します。それぞれ辛いことが多くあっても、私たちのふるさと浪江を心の支えに前に進んで行きましょう。



宮城県

渡邊 正見さん(加倉)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：2月13日

お店をオープンしました 常連さんも増えていますよ！

浪江町ではローソンのオーナーとして店舗を経営していた渡邊さん。被災後は、福島市や仙台市のホテルに移り住みながら、現在は家族3人で仙台市太白区に暮らしている。新たに仕事をはじめ忙しい毎日を送っている。



▲ローソン名取関上店(宮城県名取市)のオーナーとなり、仕事が始まった。「ぜひお立ち寄りください！」
左から、正見さん、茂之さん、京子さん

浪江町では、ローソン店舗のオーナーとして無我夢中で働きました。ようやく12年目を迎えたところでした。地域の皆さんにお店を愛していただいたことを思い出します。ようやく経営に慣れて、これからはスタツフに仕事を任せて浪江をもっと楽しんだり交流したり、あちこちに出かけた。とても残念です。

震災直後は、ローソン本部から「浪江町では、ローソン店舗のオーナーとして無我夢中で働きました。ようやく12年目を迎えたところでした。地域の皆さんにお店を愛していただいたことを思い出します。ようやく経営に慣れて、これからはスタツフに仕事を任せて浪江をもっと楽しんだり交流したり、あちこちに出かけた。とても残念です。」というお誘いがありました。その際に紹介されたのが名取市の「関上店」です。この閑上地区も津波のために多くの家屋が流された地域です。夜は真っ暗で、住む人も少なく条件としてはあまり良くはありません。また、見知らぬ土地での出店でもあり悩みましたが、出店を決意し1カ月の準備を経て昨年12月1日、オープンにこぎつけました。

開店当時の来店者は工事関係者ばかりでしたが、現在では、近くに住んでいる住民の方ともコミュニケーションがとれるようになり、常連さんになっていただけるようになりました。地域の方からは「お店のお陰で地域が明るくなって良かった！」

「閑上の中心にあるお店だから頑張っただけ！」と応援していただいています。これからは不安がありません。原発の補償が今後どうなるのか、みんなに福島・浪江・震災のことが忘れられてしまうのではないかと「ふるさと浪江」を大切にしながらも、町にはもう戻れないかもしれないとも思います。だからこそ、何かをあとにするより、自分でしっかり生計を立てていくために仕事に取り組んで行こうと日々暮らしています。

先日仙台で開催された浪江町民のみなさんの交流会には、仕事の都合で参加できませんでしたが、今後はぜひ参加してみたいです。浪江の人に会うとホッとしますから。



佐久間ともえさん(権現堂)

取材者：ビーンズふくしま 味川
取材日：2月6日

土地は変われど剣道でつながる絆！



▲左からつぐみちゃん(小6)、ともえさん、智史くん(中2)、中居優司さん

息子さんの^{ともみ}智史くんの中学校が卒業式の日
に震災。その後実家である三春に戻られ避難
生活をしている佐久間さん一家。家族の方が
皆さん何らかのスポーツをしていて、それを
通して家族の絆、地域との絆を強めているの
が印象的でした。

地震のときは家族3人で家に
おり、携帯の警報が鳴り外に出
ました。始めは何の音かわかり
ませんでした。智史は大事なP
SPをもって外に出ました。
家は半壊。瓦が落ち窓ガラス
は割れました。浪江小が近かつ
たので、娘を迎えに行き、大熊
町の職場にも行こうとしたん
ですが通行止めになって行け
ませんでした。津波の警報が鳴っ
た時は避難場所である津島へも
行こうとしましたが、凄く渋滞

であきらめま
した。
11日はみん
なで車で寝ま
した。次の日
に瓦を片付け
ようと思っ
ていましたが原
発事故の話が
あり、その日
車で三春の実
家へ来たんで
す。今も網戸
のままの所が
あるんで昨年
の豪雨で水が
入ってるんじや

浪江町はとても住みやすく
いいところですよ。帰るものな
ら帰りたい。夏涼しくて、冬暖
かい。雪も降らないし。あとほ
やっぱり地域の方がいい人た
ちが多くて。
思い出されるのは、「ゆうゆ
う堂」「三原屋」さん。おもちゃ
屋さんなんです。そちらの方
たちがとてもおもしろくていい
人たちだったんです。向かいの
家のおばあちゃんもどうして
か気になってます。
帰町できたら、剣道の先生方
だったり、保護者のお父さんや
お母さん方にお会いしたいです
稽古会でお会いできる方もいま

皆さんからのコメント

●中居優司さん
ゆうゆう堂のおっちゃんに
会いたい。太っちょ焼きそば
食おうぜ！
●智史くん
仲のよい友だちと遊びたい。
早く復興して帰れるように
してほしい。

●つぐみちゃん
私もお兄ちゃんと一緒に友
だちと遊びたい。もっと友だ
ちと会える機会が欲しいです。
今年の市町村駅伝で、浪江の
代表になれるといいな。応援
してね！

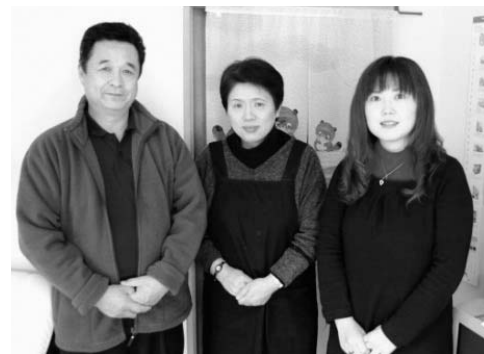


高木真智子さん(室原)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：2月12日

みんな、元気になっていますか？

南相馬市小高区の祖母の家から郡山の親戚宅、県境に隣接する
白河郡西郷村の国立那須甲子青少年自然の家、そして猪苗代リゾート
ホテルでの避難を経て、昨年7月過ぎから福島市のシンボル、
信夫山の麓の借り上げ住宅に、祖父、ご両親との4人で暮らして
います。



▲ご両親と一緒に。

■子どもたちは全員無事でした
震災当日、あの時刻は、私が
勤めていたコスモス保育園では、
ちょうど午睡の時間帯でした。
子どもたちを慌てて園庭に避難
させているうちに、町からバス
が手配され、その中に避難しま
した。私の担当は2歳児で、訳
が分からずきよんとしていま
したが、年長の子どもたちは余
震や尋常ではない周りの様子に、
怖さで泣く子どもが多かったよう
です。次々に子どもたちのお迎え
があり、請戸で津波があったこ
ともそのときに知りました。以
前、請戸の児童館に勤務したこ
とがあり、そのときの子どもた

ちの安否がとても気がかりでし
た。
私自身は午後8時ごろには帰
ることができたものですから、
仕事でいわきに出かけて渋滞に
巻き込まれた保護者の方が午後
10時ようやく園に到着できた
ことや、隣りのふれあいセンタ
ーに避難した人が溢れ、園内のホ
ールなどを開放して5、6人の先
生方が翌日まで対応したことな
ど、後から大変だったことをい
ろいろ聞きました。
■私も家族も、健やかです
私たち家族は、一時、祖父が
親戚を頼って離れ離れになりま
したが、すぐに4人が一緒に2
次避難所で過ごし、縁あって、
この十分な広さのある福島の家
を借りることもできました。こ
こは信夫山の裾にあるためか、
放射線量が高いことだけが心配
です。
まもなく1年を迎えますが、
避難所などを移動している間は、
「いつになったら？」という切
羽詰まった気持ちでしたが、福
島の家に着いてからは、心
に余裕ができたのでしょうか、

あつという間です。
現在、私は休業中ということ
もあり、この4月までは長い充
電期間だと思って、短大時代を
過ごしたいわきや須賀川の甥の
面倒を見に出かけたり、趣味で
ある手芸や工作などをし、時
には作ったものをお世話になっ
た方々へプレゼントしたりして
います。また、親しい友人とは互
いの住まいの中間点で会ったり、
メールで連絡をしたりしていま
すが、最近、手紙をよく書くよ
うになりました。
■一度は浪江の家を見たいです
祖父や私の身体を気遣って、
一時帰宅はいつも両親だけで、
大事なものを福島に持ち帰って
来ています。いつになるか分
かりませんが、見に帰りたいと
思っています。
昨年8月に約半年遅れの卒園
式が二本松で開かれました。年
長さんだけの式でしたが、本
当に久しぶりに保育園の先生方
や父兄の方々に会いできました。
時折、なみえ焼そばを見かけた
り、知り合いの顔を見るたびに、
浪江を思い出しています。

が、ばらばらに避難されてる方
も多いのでなかなか難しいです。
私は最初から実家に避難し、
仮設に入らなかつたので全然周
りの様子が分からず、始めのう
ちは申請しなければいけないも
の等がわからなかつたんですが、
今は月2回広報が届くようにな
り、そのおかげで色々分かって
とても助かっています。子ども
たちも広報を楽しみにして見て
るんです。



ヨガ&エアロピクス「UP-BEAT」長山のり子さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 長沼・嶋原
取材日：1月20日

初心に帰って始めてみよう

結婚と同時に浪江町に住んで30年。平成8年に開いたエアロピクスと整体ヨガのスタジオは、100人を超える受講者と6人のスタッフで運営し地元を根を下ろしていましたが、震災後の出会いから後押しされて、昨年6月に福島市大森でアットホームな雰囲気の「UP-BEAT」を再開されました。4月からは新たな挑戦も始まる予定で、福島の人々が元気になるように活動していきたいと明るい笑顔を見せてくれました。

震災後、家族と津島活性化センターから元東和小学校体育館に避難しました。避難所に行く途中、場所を聞くために立ち寄った商店で出会った方に道を案内してもらいました。それが縁で、空き家を紹介され3月17日から福島市に住み始めました。主人の仕事先が郡山市だったことや子どもが新たに通い始めた小学校に楽しんでいられること、家族は一緒に大切だと思いい射能は心配だけど福島市で頑張っていこうと決めました。1カ月ぐらいいはぼーっとして、今までの仕事はやめようかとも思いましたが、同じように郡山でスタジオを経営している友人から週1回のレッスンの手伝いを頼まれました。スタジオに行くうちに、震災に負けずに一人で一生懸命やっている友人の姿に、「私も負けられない。一から始めてみよう」という勇気がわきました。借上げの条件に合う住まいが見つかるより先に子どもの学区内にスタジオが見つかり、6月に「UP-BEAT」を再開しました。浪江町のとくと同じように、「らしくくエアロ」「整体ヨガ」「キッ

ズエアロ」をやっています。「キッズエアロ」は、外で自由に遊べない子どもたちのストレス解消にもなっています。スタジオには、福島市の方だけでなく浪江町の方も通ってくれていて、幼児から高齢者まで20名ほどが和気あいあいと楽しく受講しています。福島市に来たことも、スタジオが見つかったのもまたま出会った人からの紹介で、人との縁が繋がって今があるように感じます。初心に帰り、規模は小さくてもアットホームな感じで、長くゆつくり地道に続けていきたいと思っています。整体ヨガは珍しいらしく、カルチャーセンターから声を掛けてもらっ



▲長山さんと生徒の皆さん。
後列左から藤田さん、横山寛子さん、高倉澄江さん、福島郁子さん
前列左から藤田はなちゃん、長山さん、福島光結ちゃん、福島琉生くん

て、4月から講座を開くことになりました。指ヨガの資格も取ったので、今を維持しながら新しいことにもチャレンジしていきたいですね。これからも福島の人々が元気になれるように頑張っていきたいと思います。

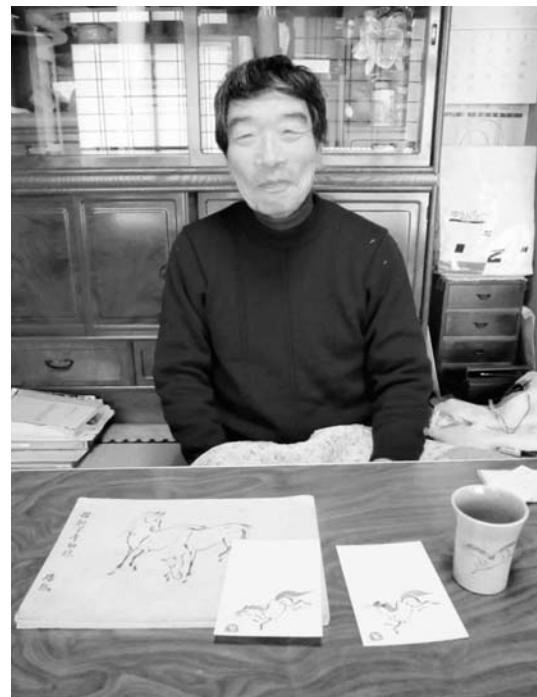


陶 俊明さん(小野田)

取材者：一般社団法人ふくしま連携復興センター郡山事務所 岩崎
取材日：2月15日

窯を始めて100年目を二本松で再スタート！

大玉村で妻の絹子さんと二人暮らし。今年はおじいさんが大陶窯を始めてからちょうど100年。今は土に触れない生活を送っていますが、大堀相馬焼への思いと向上心は衰えていません。大堀相馬焼協同組合が今度二本松につくる共同窯で、新しい焼物に挑戦していきたいと思っているそうです。



小野田の区長をしていたので、震災当日はまず地区内のお年寄りの安否確認に回りました。家内と娘は先に津島に避難しました。津島で息子、娘とは分かれて、川俣、飯坂、北塩原と転々と避難生活をしました。当初はおにぎりが家族1個のときもありましたが、避難先の住民の方々も大変な状況の中、ほんとうに感謝しています。周囲にも人を傷つけるようなことをする人がいかなかったのが、たいしたものだと思います。10月になって、家内の昔の恩師の紹介で大玉村の空き民家に落ち着くこと

ができました。現在、娘はいわき市に住んでおり、息子は愛知県瀬戸市で焼物の修業をしています。今年私の祖父が大陶窯を始めてちょうど100年になりました。100年目の年をどうしようか、考えだした矢先の震災でした。避難生活では土に触れないですが、大堀相馬焼をもっと盛り上げたい、もっと良い焼物をつくりたい、という気持ちは衰えていません。腕がなまらなように、祖父の描いた手本を見ながら絵付けの練習をする毎日です。

今度大堀相馬焼協同組合で二本松市内に仮の共同窯をつくるそうなので、私も窯を使わせてもらい、今の人たちにも使ってもらえる新しいジャンルの焼物づくりにも挑戦するつもりです。土も釉薬もいままでと同じものを使うのは難しくなりましたが、300年の伝統がある大堀相馬焼のおもむきは再現して守っていききたいです。震災の直後も近所のひとり暮らしのお年寄りが気がかりでしたが、戦後苦勞して、やっと安心した暮らしができるようになってくれた上の世代の方々が手厚くされるべきだと思います。そして浪江の皆さんには、とにかく、「くさらないで希望だけは無くしてくるな。」と言いたいです。冬の次は春が来ます。必ずこれからのいいことがあると信じて、できることをしていきましょう。